とちのき
立川七中
学校だより

〒190-0034
立川市西砂町 6-28-3
TEL 042-531-0511
FAX042-531-6103
ホームページ
http://www.m-net.ne.jp/^dai7/
校長　浅 野　博

平成２０年（2008 年）１１月１７日　No.９－２

母のクリーム・シチュー

副校長　井土　満

１１月１３日（木）に、北朝鮮による拉致被害者、横田めぐみさんのご両親、横田 滋さん・早紀江さんご夫妻が七中に来校し、講演会が開かれた。2003 年２月以来、２度目の来校である。

講演者側からの希望で、生徒だけの講演会になってしまい、保護者や地域の方にご紹介できなかったのは、大変残念であったが、多くの取材があったので、テレビや新聞でごらんになった方も多かったのではないだろうか。

滋さんは、拉致という非人間的行為は、重大な犯罪、人権侵害であることを切々と述べ、当たり前のように生活している毎日を大切にしてほしいと訴えかけた。早紀江さんは、幸せだった家族を、ある日突然おそった事件の理不尽さ、残酷さ、残された家族の苦しみ、悲しみ、拉致とわかったあとの怒り、遅々として進まぬ解決への絶望、いらだち、めぐみさんの帰る日を待ち続ける信念を話してくれた。

二人の話は、どの部分をとっても、心に響く内容であった。拉致された当時のめぐみさんと同世代の子をもつ親として聞けば、本当に涙をとどめることができなかった。

そして、話の内容と同じぐらい感動したのは、二人の人間性のすばらしさである。学校に到着された二人が最初にしたことは、正門のケヤキの樹を見上げたことである。そして、その紅葉の美しさを喜んでくれた。一緒に昼食をとりながらの会話からは、拉致被害者であることや、アメリカ・日本の元首に立ち向かい、一国を相手に戦いを挑んでいるというような、厳しさはみじんも感じられなかった。しかし、穏やかな笑顔、やさしい言葉づかい、思いやりあふれる話からは、それらの裏にある、信念をもつ者の、本当の強さや勇気を感じた。二人に接してみて、めぐみさんの生存と、いつの日かの帰還を、心から信じることができた。拉致被害者の救出活動が途切れず、日本中で共感をもって取り組まれているわけが、お二人の姿を見ていてわかった気がした。

生徒の歌に涙を流す二人を見ていて、お二人のために、めぐみさんのために、まだ帰れぬ拉致被害者のために、何もできない自分に、もどかしさがつのるばかりであった。

講演会後の３年生生徒との懇談会の中で、ある生徒が「めぐみさんが帰ってきたら何を食べさせたいですか。」と言う質問をした。早紀江さんの答えは、クリーム・シチューであった。めぐみさんが拉致された、1977 年 11 月 15 日の、めぐみさんが食べるはずだった、めぐみさんが食べることができなかった横田家の献立が「クリーム・シチュー」だったのだ。

クリーム・シチューは我が家でも食卓に上る。だが、これから先、クリーム・シチューが食卓に上っても、今までと同じ気持ちで食べることはできないと思う。

日本中の、どのクリーム・シチューよりも母親の愛情のこもった、温かいクリーム・シチューを、一日でも早く、めぐみさんが食べられる日の来ることを、心より祈る。